

元小学校教員 菊池明先生への「体験学習」に関するインタビューより（抜粋紹介）

<1. 子どもは発見が大好き>

菊池先生：

うまくいかなかったと、全然持ってこないって話をしたら、こんな風にしてみたら、あんなふうにしてみたらなんていう、アドバイスが、いろんな人からあって。とりあえずよくわからないけれども、やってみると、やっていくうちに何か続けるコツみたいなのも少しずつ見えてきて。そしてやっぱり、子どもってやっぱりね、何か新しいものを発見するとかってというのは、やっぱり大好きなんだね。まあ、大人だってそうだけれども。特に子どもはやっぱり、気がつくとか発見するっていうのは、ものすごく好きなんだと思うのね。だから、「はしりもの」っていうのは、そういうものに、その刺激を与えるというか、子どもにね。

旬のものじゃない、その（季節の）走りを持ってくるとか、当たり前じゃない変わってるものを見つけるとか。：吉國

菊池先生：

それからね、やっぱりね、一般論で何の根拠もないんだけど、やっぱり子どもって負けず嫌いなところもあるような気がするんだよ。だから僕が、これは世界一長いタンポポですって持っていくと、もう次の日には抜かされてしまう。

もっと（茎の長さが）長い子どもが見つけてくるから。：吉國

菊池先生：

そうすると、長さ比べが始まって、最終的に1 m 80センチぐらいのタンポポみつかる。そうすると、どこで見つけるかっていうと、やっぱり校庭とかではこんな（茎が長いのは見つからない）。やっぱ、林の中で見つけると。そうするとね、ちょっとね。そうか、やっぱりタンポポ、種とか飛ばしたい。林の中じゃ、こういう風になんないと、タネ飛ばないもんね、と話ぐらいはできるわけですよ。そうすると、子どもやっぱり、もっと長いのないかって、林に行くと。今度、逆に別なものを見つけてくる。そんな風な競争心をおおるというか、そんな仕掛けがわかってくると、失敗してもうまくやっていける。それと、やっぱりね、「はしりもの」を持ってこようと言っても、何を持って来たらいいかわかんない。だから持ってこれない。だから、黄色い花が咲いている植物を探してこよう！とかやってやると、タンポポとか何か色だけ探してくればいいから。そうすると、タンポポはみんな名前わかるけれども、なかには名前がわからないのがあるから。

そうそう。キク科のやつって、結構色々あるから。：吉國

菊池先生：

あるから、名前わかんないやつあります。でも、せっかく取ってきたからさ、名前調べようよって言って。図鑑を調べるという風なことをする。

<2. 通信を出そう>

菊池先生：

なんてことを、何年も繰り返してその中でわかったことは何かっていったら、子どもが発表したものを文字にして必ず子どもに返すってこと。つまり、サークルとか何かで言うとか機関誌を必ず発行すると。それをやめたら多分ね、子どものってこなくなる。だから、中にはやっぱり自分の名前を載せたいっていうんで、（はしりもの・かわりだねの動植物を）採ってくる子もいるわけ。動機は何でもいいのね、うん。

文字にして（子どもたちへ）返す。通信ですよね。：吉國

菊池先生：

通信を必ず出す。これが長続きする秘訣なんだと思うのね。その時に、極地（方式研究会）でも一時期ものすごく流行って、取ってきたものをコピーかけて。タンポポだけでB 4を1枚出すとか、みんなの真っ黒いのを（印刷して）出したり。それからデジカメみたいなのが流行ってくると、写真を撮って、そのカラーコピーで出してくとか。本当にね、凝ってやってるのは、それでもいいんだけど。それをやっぱり一般化するっていうのは、やっぱ誰でもできるってことでないような気がする。で、僕は何をしたかっていうと、とにかくメモをして、あのもう殴り書きでいいから、どんどん出して。さっきの見本みたいなやつですよね。最初の頃はね、殴り書きしておいて、学級通信で、丁寧に整理して、

はい。

菊池先生：

丁寧に書いてたんだけど。やっぱり大変なんだ。時間はとるしね。

はい。

菊池先生：

だから、もう表紙を作っておいて、用紙をいっぱい作っておいて、埋まったら日にちを入れてその日に配るというのをずっとやっていて。そして、最後に1年間終わったら、これはサービスで1冊の本にして冊子にして配るというのをやったのね。

これを。通信を束にする。：吉國

菊池先生：

そう、そうそう。うん。冊子にしてそれを配るっていうんやって。うん。これがね、ものすごく評判、子どもたちにも良くて、親たちもよく読んでね。そして、時々クレームがくるの。発表させたはずなのに、（通信に）載ってないとかね。

吉國：わはは（笑）そこまでよくチェックして。持っていつているはずなのに。：吉國

菊池先生：

お母さんからさあ、これを持ってきたはずなんで、載ってないとかね。言われてみるとね、確かにとかね。そして最初はね、ただその行き帰りにポツンと取って来てるのかと思ってただけけれども。だんだんよく見て気をつけていくとね、そういう場面も、もちろんあるんだけど、意外と子どもたちってね、目を光らせてるっていうのが、だんだんわかってくるのね。そういう、だから何て言うのかな。大学で（講義を）やってた時に、まとめとして、はしりもの・かわりだねってのは、単に植物の名前を発表するんじゃなくて、生物の総合学習なんだと。

特に何々をやる、学ぶとかっていうことはないんだけど。やりながら、例えば、林の中に行けば、背の高いタンポポが見つかるとかね。そうすると、それは光取り競争との関係で、植物は光が必要なんだから。そういうのが、そういう勉強をした時に生きてくるんだと。実際にも、生きてくるわけ。昆虫の話にしても、やっぱりそうだし。それら、単に発表する中じゃなくて。

生物の総合学習。：吉國

菊池先生：　　なんと、僕は思ってるわけね。

<3. 「はしりもの・かわりだね」実践のよいところ>

菊池先生：　　そして、やっぱりこの実践の一番良いところは何かっていったらね、教材研究をしてなくても良いってところね。意味さえわかれば、まあもちろん、（事前準備を）

ノンプログラム：吉國

菊池先生：　　そうです。だから計画はなし。でもやっぱりある目的には向かってやる。

だからデタラメだったり、何も無いわけじゃないんですよ。：吉國

菊池先生：　　そう、そうそう。植物や自然に対して興味を持ってくる関心を持っていくってようなことは起こるわけだから。だから、そんな風なことがあって。

だから、計画的に前の日にこれしてとか、そういう風な教材研究は、別にしなくても、その場に先生と子どもが一緒に。：吉國

菊池先生：　　そうそう。そしてもう一つは、これを提案する私は、だって植物のことなんか何にも（知っている必要）ないと言っただけど、わかる必要もない。最初からね。子どもと一緒にいいわけじゃない、っていう風に思うわけね。子どもと一緒に、1日1個ずつ（動植物を）覚えていけば、1週間で7個覚えられるわけ。そうすると、僕もそうだったんだけど、歩いてたら、「あっ！これ何々だ」とか、「あの子発表してたのこれだ」とかって、結構ね、やっぱり地面に目が行ったりね、結構するわけ。

そうですよね。：吉國

菊池先生：　　住宅地を歩いてても、よその庭に目がいったり、花壇に目が行ったり。やっぱり、自然とそういう風になっていくという。つまり、仰々しく自然と親しむとかさ、自然と関わるなんて言わなくなつて、ちょっとしたことで、道端に咲いてる草花に目がいったり、何でこんなところに、こんな花が咲いてんだと思ったり・・・。そういうことが、やっぱり自然に親しむとかっていうことの、具体例なんだと思うのよね。

<4. 「はしりもの・かわりだね」で子どもが探究するもの>

菊池先生：　　だからあの、通年でこう見ていくと、
うん。：

菊池先生：　　あの本当に、子どもたちが意図的に探しているっていうのは、わかるんだけど。カラスノエンドウを発表する。そうすると、図鑑を見るとスズメノエンドウってのもある。そうしたらさ、ある女の子が、とにかくそのスズメノエンドウを探すのに、毎日とにかく近所を探し回って、とにかく見つけたのね。見事に見つけて、発表するっていう。そうしたら今度は、もっとスズメノエンドウとカラスノエンドウの間に、カスマグサっていうのがあって、今度はそれを探すとかね。みたいにして。

1つからつながって、広がって。：吉國

菊池先生：　　あの俺、（通信に）載っけたと思ったんだけど載ってなかったんだけど、あの2段シロツメクサね。発表した男の子たちのグループがあるわけ。そのグループの感想文を読むとね、群れてるなって。

その2段が。：吉國

菊池先生：　　それをね、わけも書いてたんだけど。毎日どさっと持ってこないで、1日1個ずつ持っていくことに、3人で見つけたらしいんだけど。ヤジコ（＊菊池先生の愛称）を、毎日びっくりさせるため、同じ場所から1本ずつ持ってきてね。

僕見たことないんだなあ。：吉國

菊池先生：　　よく見つかるなって、他の子もびっくりするわけ。でも秘密は言わなかった。そしたら、途中でね、工事のために消えてたって。ほっくり返されている、すごいびっくりしたって、書いてくれた。だから、作文なんかでも感想文なんかでも、はい。

菊池先生：　　単に面白かったとかじゃなくて、やっぱりそういう具体的に自分がしたこととか、発見したことを基にして書くから。文が短くても中身はものすごく面白いのよね。

<5. 「はしりもの・かわりだね」の実践でスケッチはさせない>

菊池先生：　　あの、話しはあちことになるんだけど。子どもたちにも負担がいかない。あの教科書なんかだとね、必ずそのスケッチをさせたりとかするでしょう。

そうですね。：吉國

菊池先生：　　我々は、これでは、子どもにはスケッチをさせないと。発表させるだけということで、子どもの負担にもならないわけ。確かにね、スケッチしたって何の意味もないわけで、負担だけがあるから。絶対、嫌になるのよ。でもその負担が価値があればね、嫌にならないんだけど。価値がないから。

このスケッチをさせないことって、絵日記みたいなものも書かせないことっていうのは、繰り返しその、高橋金三郎先生も強調して。：吉國

菊池先生：　　だってさ、日本の理科教育とかっていうのは、それが主だからね。スケッチをさせるっていうのは。

どうですか、今でもそうですか？：吉國

菊池先生：　　今までもそう。観察日記を書くとか、そのためのノートをわざわざ買ったりとかして。

それ生活科でも、今でもそうなりますか？：吉國

菊池先生：　　朝顔とかホウセンカ植えてそれを観察させるわけ。

そんなときに観察した結果として、スケッチを。：吉國

菊池先生：　　いや、そうしないとか、何もすることないから、それしか手がないわけよ。そうすると、子どもが嫌になるね。何のためにするかわかんないし、スケッチすることによって何か発見があるのかもわからないわけじゃん。生物学者がスケッチするとかっていうのは、何か意味があって、必要だからする。

その変化を・・・：吉國

菊池先生：調べたりとか比較して。子どもたちには、何も無いわけです。・・・だから、タネ植えました、双葉が出ましたあたりはいいけどさ。本葉が出たら、あとはずっと一緒なわけでしょ。それを、どれくらい大きくなったとかってさ。スケッチさせる。全然意味ない。でもそれは、日本の理科教育の3年生とか何か、理科が始まったって、植物とかはみんなスケッチだからね。ヒマワリにしても何にしても。
それは今、今も？：吉國

菊池先生：同じ。
基本は？：吉國

菊池先生：変わってない。
そうなんやな。だから、それを否定する取り組みにもなってるのかな。・・・否定する取り組みっていうよりは、そういうことをしたら続かなくなるから、そうそんなことはしないでおきましょう、っていうか。：吉國

菊池先生：負担だけ押し付けて何の見返りもないから、見返りがあることだったらね、それはいいけれども、ないんだもん。
なるほどな。：吉國

<6. 「はしりもの・かわりだね」の実践を長く続けるには>

菊池先生：だから、話はあちこちになるんだけど。
いいですよ、はい。

菊池先生：はしりもの・かわりだねっていう実践は、僕はとにかく、本当はね。みんなにどの学年でもやってもらいたいんだけど。長続きさせるってのは、さっきも話したように、1つは必ず発表するっていうことと。先生がいくつかの仕掛けをやっぱり手に入れておくと、ものすごく長続きさせられる。
いくつかの仕掛けね、うん。：吉國

菊池先生：1つは、やっぱり先生が持っていったって発表すると。子どもが発表しなくても、先生だけは持っていったって発表すると。
うん。

菊池先生：そして、嘘八百並べて、世界一大きい葉っぱですとか。
ヤツデの葉っぱなんか、ちょっと大きめなんですよ。これはね、天狗のうちわで、世界で1番大きい葉っぱですなんて言うよね、だいたい次の日に、必ずね、追い越される。そういうのを続けていくと。だんだんそれをやっていくと。
それから、やっぱり面白いものを持ってきたら、自分のクラスだけじゃなくて、廊下とかに、ちょっと展示したりとかしながら、よその子どもたち、クラスの人にも、見せてあげるっていうね。
面白いもので言えば、先生、本当に驚くって。：吉國

菊池先生：はい。やっぱりね。ガマの穂って、ウィンナーのね。あれなんかも、2段のやつを持ってくると。本当にね、大変なんだよって。
僕だってさ、子どもの頃、キュウリとか家でもいっぱい植えて。1年分の漬物を漬けるくらい植えてたんだけど、そういう形でキュウリって見たことないわけよね。だから、おそらく知ってたらね、こういう、
双子のキュウリ。：吉國

菊池先生：きっとあったんだと思うのよね。ただ、そういう視点がないから。
キュウリたくさん見てて、中にあったかもしないんだけどさ、探す視点がない。：吉國

菊池先生：そう、そうそう。だから、やっぱり本当にびっくりできるんだろな、そういう視点を持てれば。子どもが持っていったものにもね。だってね、子どもたちからもね、インチキだろうと言われるからね。貼っつけたと。でも見るとね、それ見せるわけでしょ。でも絶対、貼っつけてない。僕はその当時は生物を多少は知ってるからさ、花っていうのは、葉っぱが変わったものが花だから。出てきてもおかしくはないというのは把握できるけれども、子ども達があるわけない。
この、このきゅうりが。これ、ここ（実）から（葉が）出てきてるってことですか。この実から、この葉っぱが出てきて。：吉國

菊池先生：そうそう。
これは見たことない。：吉國

菊池先生：だから僕写真は、5、6枚ぐらいあるよ。何回も結構発表されてるからね。
これ、種から発芽してるのとは：吉國

菊池先生：違う。別で。だから実っていうのは、花は葉っぱから進化して。
はい、花葉（かよう）っていう考えですよ。・・・：吉國

菊池先生：葉が出てきても、おかしくはない。
花と関係してる場所だから。見たことないな。子どもが持ってきた、そうですね。：吉國

菊池先生：うん。

（*2024年11月 菊池明先生とのインタビュー記録より 20分程度を抜粋して紹介。HP掲載の事前許可を得て公表しています）